

平成 21年5月31日現在

研究種目：基盤研究（B）
 研究期間：2007～2008
 課題番号：19320094
 研究課題名（和文） 魂の脱植民地化～日本とその周辺諸国のポストコロニアル状況を解消するための歴史学～
 研究課題名（英文） Decolonisation of the Soul: Historiology in order to solve the post-colonial situation of Japan and her neighbors.
 研究代表者
 氏名（アルファベット）安富 歩（YASUTOMI AYUMU）
 所属機関・所属部局名・職名 東京大学 東洋文化研究所 教授
 研究者番号 20239768

研究成果の概要：「魂」という学問で取り扱うことを忌避されてきた概念に、正当な地位を与えることができた。それは人間の創発を支える暗黙の次元に属する身体の作動であり、本来的に解明しえぬ（する必要のない）ものである。学問はそれを喜びをもって受け入れ、尊重し、その作動を抑圧するものを解明し、除去する役割を果たせばよい。そのような学問は、抽象的空間で展開する論理や実証ではなく、「私」自身を含む具体的な歴史的時空のなかで展開される合理的思考である。このような生きるための思考を通じた「私」の成長のみが、学問的客観性を保証する。

この観点に立つことで我々は、日本とその周辺諸国におけるポスト・コロニアル状況の打破のためには、人々の魂の叫び声に耳を傾け、それを苦しめている「悪魔」を如何に打破するか、という方向で考えるべきであることを理解した。謝罪も反論も、魂に響くものでなければ、意味がなく、逆に魂に響くものであれば、戦争と直接の関係がなくても構わない。

たとえば四川大地震において日本の救助隊が「老百姓」の母子の遺体に捧げた黙祷や、「なでしこジャパン」がブーイングを繰り返す観衆に対して掲げた「ARIGATO 謝謝 CHINA」という横断幕などが、その例である。我々の協力者の大野のり子氏は、山西省の三光作戦の村に三年にわたって住み込み、老人のお葬式用の写真を撮ってあげる代わりに、当時の話の聞き取りをさせてもらうという活動を行い、それをまとめて『記憶にであう 中国黄土高原 紅棗(なつめ)がみのる村から』（未来社）という書物を出版したが、このような研究こそが、真に意味のある歴史学であるということになる。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	8,200,000	2,460,000	10,660,000
2008年度	7,400,000	2,220,000	9,620,000
年度			
年度			
年度			
総計	15,600,000	4,680,000	20,280,000

研究分野： 人文学

科研費の分科・細目：史学・史学一般

キーワード： 分析心理学 ハラスメント 共生進化 コムニス 蓋 憑依 呪縛

1. 研究開始当初の背景

過去二十数年の間に「歴史問題」は日本の将来を左右しかねないものとなった。日本の周辺諸国、特に韓国と中国の多くの人々が「日本は植民地支配や侵略行為を反省していない」とみなし、強く日本を非難している。逆に、日本国内の多くの人々がこの非難を「理不尽な圧力」と受け止め、不快感や不安を抱き、国家主義的色彩を強めており、いくら日本が謝罪しても中国や韓国は「反日」をやめないのだから、もはや謝罪すべきではない、という意見が拡大する傾向を見せている。この状況を改善しない限り、東アジアに暗雲が漂い続けることになる。これはこの地域が「ポスト・コロニアル」状況にあり、真の意味での相互理解と安定性を達成していないことを示す。

この情勢に危機感を抱く日中韓の良心的歴史家は、共同研究によって相互の歴史観のすり合せを行い、共同の歴史教科書を作る活動を進めている。これは貴重かつ有意義な試みであるが、同時にこのような共通見解が形成され、それがもし各国政府によって公認されるなら、「公認の歴史観」というものが成立し、歴史の自由な解釈を妨げる恐れもある。更には、もし歴史問題が政府間の調整によって「解決」したとしても、各国の国民の思いが変わらないのであれば、それは別の形で噴出すばかりである。

申請者は、この状況を改善する方途を探るためには、『なぜ「歴史認識問題」が問題となるのか』というメタ問題を考える必要があると考えた。歴史学をはじめとする諸学の最新の知識に基づいてこのような研究を推進することで、具体的に役に立つと共に、深い歴史的理解を可能にするような、新しい歴史学を構築する、というのが我々の戦略であった。

2. 研究の目的

以上のような動機に基づき、我々は、「魂」という次元を考察の主たる対象とした。この概念を中心としたのは、植民地時代に生きた台湾のある知識人が、日本人の抑圧に遭い苦しんだ過程をその息子が描写し、「父は精神や肉体の次元のみならず、魂の次元でも苦しんでいた」と書き残していたことに基づいている。これにより、この地域のポスト・コロニアル状況を解消するための理論的枠組みへの到達を目指した。

安富は既に、本条とともに、複雑系科学の成果に依拠しつつ、「ハラズメント(呪縛)の理論」を提唱していた。この観点から、フ

ランツ・ファノン、M.K. ガーンディー、ピーター・ドラッカー、グレゴリー・ベイトソン、アリス・ミラー、マリー＝フランス・イルゴイエヌ、アルノ・グリューンらの思想を再検討するとともに、その視点から、東アジアの植民地化・脱植民地化過程とその認識を再検討することを直接的な目的とした。

3. 研究の方法

我々の方法の特徴は、多地域かつ多分野にまたがる総合的アプローチにあった。総合的アプローチは往々にして単なる寄せ集めに終わるが、「魂」という概念を主軸に掲げることで、多様性のなかの統一を実現する道が開かれた。

近代学問が問わなくなった問、すなわち「魂とは何か、魂は何を必要としているのか、魂は何を苦しむのか」という問題に、学問的厳密性を確保しつつ取り組む、というのが、我々のとった戦略であった。

4. 研究成果

初年度に我々は、「魂の植民地化」とは何か、という問題を幅広い観点から検討した。その結果、「自らの視点を失い、他者の視点で自分自身を考えること」という一応の定義に到達した。この論点は、精神分析学・分析心理学などの分野で議論されてきた、意識と無意識との乖離の問題、さらには、哲学の分野で議論されてきた自己欺瞞という概念と密接に関連することが明らかとなった。

また、歴史学との関連では、香港人・台湾人の心性をこの観点から考察し、共通の側面を取り出すことができた。更に、数理学、微生物学などの全く異なる分野での成果を踏まえ、「創発とそれを阻害するもの」という観点から理論的考察を深め、こういった観点が、『論語』の思想と結びついていることを確認した。中国から李昌平氏を招聘し、東京・名古屋・大阪でシンポジウムを開催し、「魂の脱植民地化」の観点から中国近代史を捉えなおし、現代の諸問題を乗り越えるための知見を得た。

これらの成果をふまえ、第二年度では、魂の脱植民地化の理論的研究をより精緻に展開した。チューリッヒのユング研究所のウルズラ・ヴァイス氏を招き、C. G. ユング、E. フロムらの心理学の成果との関係性をより深く掘り下げた。こういった「無意識」を含めた人間像を前提とすることは、歴史学の分野ではあまり行なわれてこなかった。それは、フロイトやユングの精神分析学・分析心理学が、学問的枠組みと整合しない面があま

りにも多かったからである。

我々は、十分に学問的基盤に合致する形で、「呪縛」あるいは「ハラスメント」についての理論の構築にある程度の成功をおさめ、この制約を超越しえたと考えている。

また、網野善彦の「無縁」論をこの議論に接続して再構成することが、理論的に重要な意義を持つという見解に到達した。この理論を、日本および旧日本植民地・占領地社会の具体的歴史的過程に適用し、どのような論理展開が可能であるのか、またその観点が既存の資料の新しい利用をどれほど可能にするのか、を示すための実証的研究を展開した。さらにそこからのフィードバックを得て、理論的研究を推進した。

以上の成果に基づいて、代表者の安富は『生きるための経済学』（NHK出版）を上梓した。ここでは「選択の自由」という概念そのものが持つ危険性を指摘し、そこから抜け出すための方途を論じた。

第二年度は、初年度の成果を公表するための論文集の作成を重点的に行なった。この成果は、第二年度末に出版された東洋文化研究所の『東洋文化』第89号の「魂の脱植民地化」特集に示されている。

この論文集は「私を含む研究」「理論的考察」「無縁」「開発・環境問題」の四部から構成されている。学問領域としては、哲学、心理学、微生物進化、民族音楽学、歴史学、中国学、人類学、NPO経営、環境問題などを跨いでいるにも拘わらず、一貫性を保つ論文集となった。

「魂の脱植民地化」とは、自分自身で作り出した呪縛から逃れることである。魂の植民地化あるいは脱植民地化についての研究は、自分自身のあり方への問いを常に含んでいる。これを避けて、自分を「観察者」という安全な場所に置いておくことはできない。他者について問いを立てているつもりでも、その問いは、自分自身の拠って立つ基盤だと思いついていて、呪縛への問いとなつて、こちらに向かってくる。この自らへの問いに勇気をもって向き合うことは難しく、ときに恐ろしいことである。

かくしてこの研究は、「私」を「対象」から切り離すことを許さず、「私」を含んだ思索および記述を要請する。本特集号の第1部が「私を含んだ研究」となっているのはそのためである。この部を構成する深尾葉子・千葉泉・等々力政彦による三論文はいずれも、自分が生きるために行われた知識の探求の過程が、そのまま生の形で表示されている。深尾は、「魂の脱植民地化」という言葉の提唱者である。ここでは自らの脱植民地化過程から引き出された「呪縛」「蓋」「憑依」という概念を論じつつ、「魂の脱植民地化とは何か」についての基本イメージを提出する。千

葉論文は、同じく自らの半生を振り返りつつ、「開発＝脱植民地化」の過程を、「ロージョ（rollo）＝巻かれているもの」を「デサロジャーラ desarrollar＝展開」する過程として捉える視点を提供する。等々力論文は、自らのいじめの体験のなかから、共にある、とはどういうことかという問いに到達した著者が、自ら生きる力を獲得するべく、微生物の共生進化実験と、トゥバの音楽伝播過程の研究とを通じて、その本質に考察を加えたものである。

第二部の「理論」は、ハラスメントについての本條論文と、C.G. ユング精神分析研究所研究部門長のウルズラ・ヴァイスの英文論文から構成される。この二論文は、直接には自己に言及するものではないが、どちらも抽象的議論ではなく、自らのありかたへの反省のなかから生み出された理論的考察である。本條論文は、サイバネティックスの発想を徹底させることで、グレゴリー・ベイトソンの「ダブルバインド理論」の問題点を明らかにして、より一般的で一貫した「ハラスメント理論」を構築する画期的な内容を持つ。ヴァイス論文は、人間が外界とのやりとりを可能にするために技能を身につける過程が本質的に「植民地化＝耕す（colere）」という性質を帯びており、「脱植民地化」とは、植民地状態から元の状態に戻るのではなく、植民地化過程で身につけてしまったものをアウフヘーベン（aufheben）することで、自分自身にふさわしいものを残す過程だと指摘する。この動詞には、三つの意味があり、一つは「取り上げる」ということであり、二つ目は「取り上げて捨てる＝破棄する」という意味であり、三つ目は「取り上げて大切にしておく」という意味である。自分が身に帯びたものをとりあげ、自分にふさわしいかどうかを考え、ふさわしくないものを捨て、ふさわしいものを大切にしておく、という過程が重要なのである。

第三部は「無縁」をテーマとする三本の論文から構成される。安富論文は、西洋の思考様式の基礎にある「communis＝共通の」という概念を問題にする。この言葉から、「共同体」「コミュニケーション」が派生するが、これらを前提としてしまうことで、認識上の障害が生じている点を明らかにし、そこから離脱するために、網野善彦の提唱した「無縁」の概念が重要であることを指摘する。これを受けて内田論文は、網野の無縁論の出現過程を論じる。内田は、網野自身が自らの呪縛から逃れ、新しい人間関係を形成する過程と、無縁思想の展開が密接に関連することを指摘する。與那覇論文は無縁論をめぐる議論を整理し、「共同体」概念から離脱するための無縁論が、共同体を前提とする議論にいつも回収されてしまう誤解の連続であったこと

を明らかにする。

第四部は、「開発・環境問題」をテーマとする諸論文から構成される。これは、魂の植民地化のもたらす弊害が、これらの問題群に端的に表現されていると考えられるからである。李昌平は、中国農村の危機的状態に身を賭して警鐘を鳴らし、農村政策の変化の起点を作ったことで知られる。ここに収録した中国語論文は、本研究会の招きにより我々との議論を経て日本で行った講演の内容をまとめたものである。李昌平論文は、中国近代史において、＜農民＞の自主性と中国そのものの自主性が並行関係にあることを指摘し、90年代以降の中国が深刻な自己植民地化過程にあり、それが現在の危機的状況の根底にあることを示している。王向華による英文論文は、香港ヤオハンにおけるフィールドワークに基づき、日本人グループと中国人従業員との間の軋轢とその植民地的心性の作動を明らかにする。富田啓一は、故遠山正瑛氏が始めた内モンゴルの砂漠での植林活動を調査し、それがポプラをより多く植えるという目標の硬直化により、環境破壊を引き起こしているメカニズムを明らかにした。宮本万理は、ブータン王国の近代化過程を振り返り、独立した国民経済を持たず、外交・防衛権もインドに譲渡しているこの国が、それを大きな問題とは見なさず、完全な独立国として自己認識し、多くの深刻な困難を抱えながら、戦略的に対応してきた過程を明らかにする。宮本はそれを、他者への依存から脱却しようとするのではなく、依存を通じて自立を達成するという戦略として描き出した。

このような形で我々は「魂の脱植民地化」という見方を確立し、歴史学を中心とした諸学の再編と統合への見通しを得ると共に、日本が抱える「反日」問題への対処の道を見出したものと考えられる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計9件)

深尾葉子「魂の脱植民地化とは何か 呪縛・憑依・蓋」『東洋文化』第89号、940頁、2009年。

千葉泉「『自分らしさ』を中心に据える私が中南米の歌をうたう理由」『東洋文化』第89号、41-65頁、2009年。

本條晴一郎「ハラスメントの理論」『東洋文化』123-153頁、2009年。

安富歩「*communis*からの離脱」『東洋文化』165-192頁、2009年。

與那覇潤「無縁論の空転 網野善彦はいかに誤読されたか」『東洋文化』217-260頁、2009年。

安富歩「創発研究戦略再考」『パリティ』23巻2号、36-39頁、2008。

安富歩「無縁・呪縛・貨幣」、鈴木公雄編『幣の地域史 中世から近世へ』岩波書店、278-310頁、2007年11月。

安富歩「論語の論理構造」『東洋文化研究所紀要』152号、59-117頁、2007年

福井康太「ADRの機能とその射程 - 紛争解決から多様な関係調整支援へ - 」『仲裁とADR』2号、81-90頁、2007年。

〔学会発表〕(計3件)

安富歩「魂の脱植民地化 孔子とガンディーの智慧と勇気」東京大学130周年記念事業東京大学プレジデントカウンスル・フォーラム2007「アジアから問う共生の哲学」2007年11月9日、東京大学。

松重充浩「日本における中国東北地域史研究の展開と特徴：近代史(20世紀前半)部門と事例として」満洲学会第15回学術大会、2007年8月24日、韓国安東大学校人文科学研究所

YASUTOMI Ayumu, "The decolonisation of the Soul", International Workshop for the decolonisation of the soul, The University of Hongkong, 5-6/11/2007. (Organiser)

〔図書〕(計1件)

安富歩『生きるための経済学』NHKブックス、2008年。

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

6. 研究組織

(1)研究代表者

安富歩 東京大学東洋文化研究所 准教授

研究者番号：20239768

(2)研究分担者

(3)連携研究者

長崎 暢子 龍谷大学 アフラスシア平和構築センター フェロー

研究者番号：70012979

福井 康太 大阪大学 大学院法学研究科 准教授

研究者番号：00302282

若林 正文 東京大学 大学院総合文化研究
科 教授

研究者番号：60114716

金 早雪 信州大学 経済学部 教授

研究者番号：20186307

鄭 雅英 立命館大学 経営学部 准教授

研究者番号：90434703

松重 光浩 日本大学 文理学部 教授

研究者番号：00275380

三谷 博 東京大学 大学院総合文化研究
科 教授

研究者番号：50114666

北田 暁大 東京大学 大学院情報学環
准教授

研究者番号：10313066

深尾 葉子 大阪大学 大学院経済学研究
科 准教授

研究者番号：20193815

久末 亮一 政策研究大学院大学 研究助
手

研究者番号：60422383

本條 晴一郎 東京大学 東洋文化研究所
特任研究員

研究者番号：50506748

與那覇 潤 愛知県立大学 文学部 准教
授

研究者番号：50468237

千葉 泉 大阪大学 大学院人間科学研究
科 教授

研究者番号：20217243